
ちえんじとらんすふおーむ

神威メルブラ勢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちえんじとらんすふおーむ

【Nコード】

N4188E

【作者名】

神威メルブラ勢

【あらすじ】

最強・最凶・魔力膨大の老年の大魔導師にして大魔法使いの『ジーク・シール』。遺跡で発見した神具によって波乱万丈の大冒険へ！？え？若返りに性別転化！？魔術師の彼女（性格&元男）は剣の道へ！？

第1話 『ぷろろーぐ』

プロローグ

「出でよ、地獄の極炎ヘル・フレイム」
ゴオオオッ！！！！

詠唱に応え地獄から死の炎が燃え盛る。

その炎は対象を燃え尽くすまで消えず、対象の命を吸収する……。

ヘル・フレイム……、それは単体を対象に死の極炎を呼び起こし、対象を燃やし尽くす上位魔法である。

それを唱えるは老年の大魔導師、『ジーク・シール』その人である。彼は10歳で魔法学園を主席で卒業、専修過程を修め数々の謎を解き明かしたSSS級の魔導師であり、若かりし頃は残虐非道と恐れられていた。

・ ・ ・尤も、今現在もその性格自体は何も変わっていなかったが。
・ 変わったのは時の流れに逆らえぬ肉体、年月をかけ得た知識のみである。

「まったく、何故俺が出ないといけないのかね、この程度の魔物に。」

本人はこう言っているが、実際彼が倒した『ルーク』と称された魔物（ゴーレムみたいな格好をしている）は魔物の中でもランクBに値する魔物である。

『ランク』・・・ランクとは魔物のレベルをあらわすものである。最上位がランクSで、それは神話などに出てくるドラゴンや、神のレベルである。

その後、A、B、C、D、E、Fと続く。

最下位はFランク、これはスライムなどであるが、BとCでは大きな開きがあるのが現状である。

「あゝあ、年ってのには抗えないな、体がついてかねえ。」

衰えていく自らの身体に愚痴を飛ばしながら、周りに集まってくるルークたちを蹴散らしていく。

こうして聞くと魔物退治をしているように見えるが、今回の依頼はあくまであるものの入手である。

・・・・もつともこの男、ジーク・シールにとって仕事とは楽しむものであり、依頼を遂行する過程でどの程度楽しめるかが大きなウエイトを占めているので、なんともいえないではあるが。

・ここは『遣魔の洞窟』危険度が高く、並みの冒険者は踏み入ることできない強力な結界が張られ、入り口には門兵が常に常駐している。

もつともその最深部へはいまだ誰も到達したためしがないという・・・。

言い忘れたがジークは魔術師、というか世界一と名高い大魔導師である。

しかし本人はそれに興味が無いようで、己の研究や暇つぶしのために洞窟へとしばしば足を運んだ。

北に幻の薬草があると聞けば10分後にはその北の大地にいるし、南に幻の獣が居ると聞けばこれまた10分後にはその南の大地にいる。

・・・そういうわけなので当然決まった収入源があるわけでもなく、洞窟探索のついでに傭兵として仕事の依頼を受けるのが恒例となっていた。

「えーっと、今回の仕事はーっと。」

そういうながらジークは懷に手を入れる。

目当ては己の持つ依頼書である。

「あつたあつた、えーっとなにになに？
目的のものはこの洞窟奥にあるもの？
なんだそれ？」

確かに誰も到達したことのない洞窟の最深部に何があるかなど誰も知る由もなかったはずである。

ジークは周りに集まったルークたちを粗方片付けると首をかしげた。

「ま、いいや、さっさと見つけて帰ろう。」

どーせだから研究用にその『あるもの』を持ち帰るって手もあるな。
」

そう、この男の2つ目の悪い癖がこの探究心である。

誰にでも探究心はあるが、この男のそれはとても強く彼の行動の原点といっても過言ではない。

「相変わらずでござるな、ジーク殿。」

突然、洞窟内に声が響き渡る。

しかし声の発生源はどこにも見当たらない。

ジークは慌てることも無く、洞窟内のある場所を凝視しながらこういった。

「ふん、久しぶりだな、服部」

ジークがそういうと洞窟の壁がはがれ、そこから忍者服の小柄な男が油断なく姿を現した。

これぞ古来より極東の国ジパングの暗殺集団、『忍者』に伝わる忍術である。

この服部という男、忍者八門に精通し、諜報や暗殺にかけては右に出るものは居ないと言われている。

「そうでござるな、してジーク殿はどのような目的でここへ？」

「ん？俺は仕事の依頼でな。

そっちは何だ？」

ジークは特に興味もなさそうな口調でそういった。

「それがしはこの洞窟の最深部にあるといわれる神具の有無を確認しにきたでござるよ。」

服部はこともなげにそういった。

この男、目的のものはただ情報であり、神具自体に興味はないようである。

「ほう、俺の目的もおそらくそれだろう、途中まで共に行くか。」

ジークは『あるもの』とは神具のことだったのか・・・、と内心思いながら口にはださずそういった。

「いいでござるな、ジーク殿とともにあれば魔物も物の数ではありますまい」

服部がおどけるようにそういってジークは真顔でこういった。

「当然だ」

と。

そうして2人が出会ってすぐ。

「何かあるみたいでござるな」

服部がさきにあることに気づく。

「お？ 明かりだと？」

ジークも遅れてその『場所』に気づく。

みると洞窟の一角から光が放たれていた。

それは太陽の光のように暖かく、月の光のようにただ静かにそこにあった。

「ふう、やっと着いたのか。」

2人がその部屋へ入ろうとした直後、

ギシャアアアアアッ！！！！！！

どこからとも無く5体のグレートオーガが姿を現した。

オーガ、ランクAの上位モンスターでありこれを倒すことができた者は、国王より騎士『ナイト』の称号が送られる。

それほどの上位モンスターが5体、しかも同時に姿を現したのである。

普通では考えられない事態であつた。

「・・・これは、防護結界？」

「失敗でござるな、まさか侵入者対策用の召喚術式が張られていたとは、気づかなかつたでござる。」

しかし2人はとくに焦った様子もなく、淡々と状況を分析している。もし他人がこの場に居れば、自殺志願者の2人組にしか見えないだろう。

「服部、面倒だ、お前に任せる」

ジークは心底面倒そうな顔でそういった。

「え、ジーク殿が魔法でササッと倒しちゃってくれでござるよ。」

「うるせえ！さっさとやれ！」

服部の反論を一切受け付けない、といった様子でジークはさっさと部屋の中へと入っていつてしまった。

「やれやれ、まったく人使いがあらいお方でござるな、ジーク殿は。」

服部はため息混じりにそういうと、懐より小振りの太刀を取り出した。

それは刀というには反りが少なく、鰭が大きいのである。

つまりは『忍刀』と呼ばれる忍者の刀であるが。

「さっさと倒してジーク殿の後を追うでござるよ。」

そういうと服部は一陣の疾風となりオーガ達に襲い掛かっていった。

一方、オーガを服部に任せたジークは防護結界の部屋の前まで来ていた。

その部屋だけは老朽化など一切しておらず、誰が見ても洞窟内の他の場所とは異なる事がわかるだろう。

「ふん、俺にこの程度の結界が通用するとも思ったか。」

ジークはそういうと聞き取れるか聞き取れないかという微妙な声量で詠唱を始めた。

「消えろ、 阻壁の破界 ディスぺル」

瞬間、ジークの指先から眩い光が伸びたかと思おうと、防護結界の部屋へと一直線に伸びていった。

光は結界に触れると先ほどまでの柔和な光から破壊のそれへと変化する。

次第に勢いを増し、結界全体を包んだかと思うと、いっせいにそれ

がはじけた。

事も無げに防護結界を解いたジークはその部屋へと足を踏み入れていた。

「ああ、どうやら間に合ったようでござる。」

ふと横から声が聞こえた、服部のそれが。

「ん？もう終わったのか、結構早かったな。」

ジークは特に關心なさそうにそういった。

服部もよほど手ごたえが無かったのか、少し不満そうにこういった。

「あの程度、動きが遅すぎて逆に相手にしづらかったでござるよ。」

そう何を隠そうこの服部という男、普段は神話レベルの洞窟、神殿の調査をしているのである。

もちろん情報収集命の忍者にとって習慣となっていることではあるが並みの、いや並み以上の傭兵でさえ神話レベルの神殿となるとおそらく1階層目のモンスターに手も足も出ないだろう。

噂ではいまだ誰も踏み入れたことがないといわれている地のことでさえ彼は情報を持っていると言われている。

「ま、お前が相手じゃそらそうだな。こっちは結界を解いたトコだ、さっさとはいるぞ。」

「御意、いくでござる。」

2人はそういうと目前に広がる部屋の中央へと足を踏み入れた。

はいつてわかったが、この部屋は特に大きいわけではなかった。
フツのどこにでも在る部屋に見える。

・・・部屋全体が薄く光っていることを除けば、であるが。

その中央には一本の剣がまるで四方から糸で引かれているかのように
空中に停滞する形で存在していた。

ユラユラとその場で漂いながら、しかし決して一定の位置から離れる
ことはない。

「これが、神具か。」

「神具、でござろうな。」

2人は呆然とその剣をなめていた。

否、正確には魅入っていた、というのが正しいだろう。

それほどまでに見るものをひきつける剣だった。

姿は西洋風の両刃剣で、刀身は見る者をひきつける何かを秘めていた。

柄には宝玉が1つ、何色とも区別できない、見る者によってそれは
色を変えるかのようにだった。

しばしの沈黙がこの場を支配する。

「・・・通常のギルドに入れられた情報だからたいしたことではない
モノだと思っていたが、とんでもないな。」

そうジークは目の前の事実を確認するかのようにつぶやいた。

「そうでござるな、これは並みの人間が持つべきものではないでござる。」

服部もその言葉に同意する。

「とりあえず、依頼のほうは『行ったが何も無かった、恐らくガセネタだったのだろう。』ということにしておいたほうがいいな。問題はこの剣をどうするか、だが・・・。」

「これをここにおいておくと誰が見つけるかわかったものではないでござる、ジーク殿の魔術でこの部屋の結界は消失してるでござる。ここは持ち帰るのが上策か、と。」

服部がそう提案する。

ジークはその言葉に頷くとおもむろに剣に手を伸ばした。

(剣よ、お前は一体何なんだ?)

ジークはそう心の中でつぶやくと剣の柄に触れた。

その瞬間、

バチッ!!!!!!

一瞬その場が光に満ち、すぐにもとに戻る。

しかし触れていたはずの剣は無く、ジークの姿も無かった。

「なっ!? ジーク殿! どこへ消えたでござるか!？」

服部があわててジークがいた場を見渡すが、どこにもその姿を認めることはできなかった・・・。

プロローグ、完

第2話 『ここはどこ？私は・・・女！？』

第1話 『ここはどこ？私は・・・女！？』

例の洞窟で必死に服部がジークを探している頃・・・。

南に数百キロも離れた森の中にジークの姿があった。

右手には例の見間違えようがない、神具と共にあった宝玉を装飾としたブレスレットがはまっている。

「・・・ここ、は？」

しばらくしてゆっくりと目を開けたジークは自分の居た場所とかけ離れた風景にしばらく呆然と突っ立っていた。

そばには湖があるものの、なぜか人の気配はない。

知らぬ人が見れば少女が自然を身体で感じているようにも見えるかもしれない。

そう、『少女が』である。

驚くべきことではあるが飛ばされる前と後ではジーク本人に劇的に変化したことが一つ在る。

もつとも本人はソレに気づいていない様子であるが。

見た目が『少女』になっているのである。

今のジークをジーク本人と見分けられるのはこの小説を読んでくれている諸君らだけだろう。

・・・悪い、失言だ、忘れてくれ。

とにかく理由はわからないが性転化& a m p; 若年化、もしくは若返りといった現象が起こっているようである。

「ここは、どこだ？」

もう一度ジークは同じことをつぶやいた。
当然返事など期待したわけではなく、自然と口にでた、という類のものである。

「ここ？」

しかし、返事はあった。

それは一度聞いただけで忘れられないほど清く、美しい声だった。
男とも女とも取れない、ある種異質な存在の声。

「誰だっ!？」

ジークは身構えると詠唱体勢に入る。

しかし声の主はジークの感知力を持ってすらも感知できなかった。

「まあ、そう怖い顔しないでよ。僕は人ではない、というか生物で
すらないよ。」

声はそういった。

特に気にするでもなく、淡々とそういった。

「なんだと？人で無く、生物でもない、だと？」

ジークはそういいながらも声の正体を見極めようと辺りを警戒する。
それと同時にこの場に満ちる魔力構成を分析。

「まさか・・・、この構成は先ほどの神具!？
しかも発信源が俺自身だと!？」

そう、ジークが構成分析の結果導き出した答えがソレだった。
しかし本来そんなこと不可能だし、する方法もないはずである。

「ああ、僕は確かに今君の中に居る。
ほら、キミが僕に触れただろ？そのときにはいったのさ。」

声はそういった。

そしてジークの返答を待たずこう続ける。

「さて、いろいろ聞きたいことがあるだろうけど先にコッチの話を
聞いてくれるかな？」

そう有無を言わせぬ声色で神具と名乗りし者は告げた。

・・・もつともジークがその言葉に耳を傾けるはずもなく。

「うるさい、まずはコッチの話からだ。

俺の中に居るのなら俺がマスターというわけだろう。

まずは俺の質問に答えてもらおうか。」

そうジークは言った。

「ははっ、まったくあんたって本当扱いにくいな、確かに今のマスタ
ーはアンタだよ。

でもね、私たちは自身の意志を確立している、だからマスターだから
といって強要できると思わないことだね。

まあいいよ、今回はアンタの話を聞くことにしよう。」

ジークの指摘にも動揺の色をみせず（尤も声色であるが）、ジーク
の言葉をひらりと避け、そして質問権を譲った。

「・・・自身を確立する道具など聞いたことがない。
だがおそらく事実なのだろう、いまの状況がすべてを物語っている、
な。」

「あれ？」

珍しいね、そこは否定しないんだ？」

「ふん、自身の目で見たことは疑いようが無いからな。
結局世界など自身の印象でしか存在し得ない。
己が信じるものがすべてだ。」

そう、ジークは淡々と告げた。

「うーん、やっぱり扱いにくいよ、アンタ。
まー、そういうヤツ嫌いじゃないけどね。」

「ふん、貴様も十分変わっている。
ところで質問いいんだよね？」

「ははっ、ちげーねえ。
いいよ、何からいく？」

そう神具は笑いながら言う。

「まず貴様の名前は？
神具だからとて銘ぐらいはあるだろう。
そして何がおこったのだ？
そして此処は？
そしてこの魔力の歪みは一体？」

「ははっ、質問攻めだな。」

もっとも俺が話そうと思ってたこととほぼ同一だよ。

まず俺の名だが昔、今の文明が存在しなかった頃は『創聖』とか『イマジンドリーム』などと呼ばれていたな。

そしてあれはアンタが俺に触れたことによって契約が結ばれたのだ。此処はあの遺跡から数百キロ離れた『聖の森』ひじりのもりだ。

魔力の歪みは空間転移の名残だろうな。

アンタの魔力が膨大過ぎて契約時に歪みがしようじたんだろう。」

神具はそこまで早口（少なくともジークはそう思った）で話し終えると一息、息継ぎのために（？）（神具にソレがあるのか甚だ疑問だが）言葉を切った。

「・・・イマジンとやら、何故求めもしなかった俺と契約など？」

「いや、こればかりは俺にもわかんねーんだよな、俺はあくまで道具だからよ。」

契約がどうかいう時点で『道具』の域を超えているとおもったジークだったが口には出さなかった。

「ならばイマジン、貴様の能力は？」

神具と呼ばれるモノだ、能力ぐらいあるだろう？」

「ああ、能力ね、俺の能力は神具の中でも1，2を争うんだぜ？その点では契約したことを喜んでもらいたいね。」

そうイマジンにしては珍しく声を上げてそういった。

「・・・自分で言うのもなんだが、俺は魔術師としてかなりのレベルにいる。
むしろ魔術師としては最強レベルといっても過言ではないと自負している。」

並大抵のことは何でも出来るとも思っている。

そんな俺にさえ実現できないような能力なんだろうな？」

ジークはあざけるようにそういった。

「んー、能力自身のコトでいえば絶対に出来ないと思う。
尤もその内容には出来るものも存在するけどね。」

対するイマジン（ジーク命名）はかすかな笑みの声色でそういった。

「俺の能力、ソレは『空想具現化』己が想像するすべてを具現化する。」

ソレに制限など無く、故に最強と呼ばれた。

ただし使いこなせるものも無く、悪用されないように当時の最高権限者によって封印された。

アンチマジックを含むあらゆるものに耐性を持つエンシェントスぺル『神的封印』によってな。

アンタは使いこなせるかな？

とても楽しみだ。」

「だが俺はソレを解いた。

太古の呪文によるソレは今の呪文では絶対に解けないはず。
つじつまが合わない気がするのだが？」

ジークは尤もな疑問を抱き、そういった。

エンシェントスペル、太古の呪文と呼ばれるソレは現在の呪文の数十倍の力を持ち、詠唱をほとんど必要としないものである。

ただしそれにはイメージが強く影響し、使用する魔力も膨大なので、現在では存在すら忘れかけられている呪文である。

「あゝ、エンシェントスペルには特徴があつてね、封印系の呪文はソレに使用された魔力以上の魔力を持つものには簡単に解くことができるんだ。

ただあれをかけたのは当時の最高権力者、当時は魔力によって地位が決まっていたから現実的に、誰にも解くことができないものだった、アンタがくるまでは。」

「するとなんだ？」

俺が貴様のマスターとなる理由は封印をといたから？」

「正確には封印を解けたから、かな。」

イマジンは嬉しそうにそういった。

「もっとも普段の私はこうやって話すことも出来ないんだけどね。」

そしていきなりの爆弾発言

「おい、それはどういうことだ？」

「だってこの『念話』、かなりの魔力を消費するんだよ？
常に使うなんてジークの魔力が無尽蔵にない限り無理だよ。
今だってかなりの魔力消費が・・・。」

そこでイマジンの言葉は停止する。

「ん？」

どうした？」

ジークが怪訝そうにそういうと

「アンタ、やっぱり化け物だね・・・。

ほとんど魔力が減ってない・・・、全体の1パーセントにも満たない消費量だ。

俺との契約& a m p ; 空間転移までやったのに・・・。
どんな魔力量してるんだよ・・・。」

イマジンがこれまた珍しく狼狽した声でそういった。

「ふん、おれが普通であるはずがあるまい。
で、貴様は結局話せる状態でいれるのか？」

「ああ、問題ないみたいだ。

話したいときに心でそう告げてくれればいつでも出てくるよ。」

イマジンがそういう。

「・・・あ!!!」

100メートル先に魔物の反応が！」

いきなりイマジンがそう告げる。

「ほう、それはいいタイミング、貴様の能力を確認するいい機会だ。」

「え……、使うの、能力を？」

「ああ、貴様のその自身、いかほどのものか見届けてやろう。」

「……つかうのはアンタなんだけどね。」

そういうあいながらジークは『意味ある言葉』をつむぐ。

「風の精霊たちよ、我が身を纏え！ 『エアブースト』！」

そう呪文をつむいだ瞬間、ジークの周囲に風が集い身体を空に上昇させる。

「へえ、風の魔法か、魔術じゃないところがすごいね。」

「ふん、俺は魔法使いの称号ももってるんだ、ただの魔術師だともうなよ」

そういいながらもすでに5メートルの距離に魔物が見えるところまでできていた。

恐るべきスピードである。

「さて、能力の使い方は？」

「かんたんさ、具現化したい事象をイメージしながら『展開』と一言宣言するだけでいい」

イメージの気の抜けた声。

ソレを耳に受けながらジークはイメージする。

イメージするは千の剣。

千の剣は相手を滅するためにその刀身を煌かせ、自身の出しうる速度で一斉に目標へと突進する。

それはただの突きではなく、すべてが魔力を纏い、一撃一撃が必殺の威力を持つ。

そんなイメージ。

やがてイメージを確立させたジークはこう宣言した。

「いくぞ、『展開』」

そのジークの言葉に呼応するように周囲に千の剣が具現化、目標の魔物に向かって疾走する。

キィィィィー！！！！！

煌く千の剣は音速を超え、そんな耳障りな音を立てながら目標へと突き刺さる。

魔物の姿はやがて千の剣に埋め尽くされ、視認すら出来ぬ形へと変貌していった。

「・・・ふざけた能力だな、これは。」

ジークは半ば呆然としながらそうつぶやいた。

「だから言っただろ？」

俺の能力は最強さ。

さて、俺はもう必要なさそうだから眠るとするよ。

呼び出したかったら俺自身をイメージしろ。

そうすれば俺が『具現化』する。

あ、ちなみにアンタの体、俺に掛かった呪術の影響で全盛期の年

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4188e/>

ちえんじとらんすふおーむ

2010年10月11日05時11分発行